

Underground Libertaire: 地下の自由人

【月刊】 アナキスト系+αの何でも媒体 **VOL.1** 2025年9月号(第2版) 略称アンリベ

Anti-Copyrights 2025, アンリベ編集委員会. All resource shared

創刊の目的

今このネット社会では、誰もが自由に情報を発信できるようになったように思えます。しかし、SNSの投稿は全てテック企業のデータセンターに集められており、何か都合の悪い発言をすると消されるかもしれない、アカウントが凍結されるかもしれない、これだからテクノ封建制と呼ばれ批判される訳です。中央集権的なSNSは常に検閲に晒されています。個人ブログとか自分でサーバーを管理していても、政府の圧力を受けてプロバイダなどのインフラ管理者がIPアドレスやドメインをブロックしてしまったらお終いです。西側諸国ではまだマシでも、中国やロシア、トルコなどの権威主義的な体制下では顕著です。本当に表現の自由が保障されるのは何か、と考えを巡らすと、詰まるところ紙媒体の地下出版しか選択肢がない訳です。

真に自分達の意見を表明するには、自由な媒体が必要です。SNSではどうせフィルターバブル現象や不透明なSEOで碌な事にならないでしょうから。この新聞は19世紀のル・レヴォルテ紙のような精神で地下出版を、表現の自由を防衛する為に現代でこそやってのける為に生まれました。題名ですが、Undergroundの部分は地下的や反体制的な意味があり、Libertaireはフランス語で自由人やアナキストを意味します（英語で言う所のLibertairanです）。月刊なので基本的に1ヶ月に1回発行します。この号の第1版は2部刷って、そのうち1部を配る事ができました。まだ極めて小規模ですが、おかげさまで初めての読者を獲得する事が出来ました。この勢いでこの紙面の第2版を書く事が出来ました。

皆さんの寄稿を歓迎します。何でも良いです。どんなにヤバイ内容（例えば要人〇殺を扇動する等）でも基本的にNGは出しませんし、むしろの方がパンチが効いて楽しいです。寄稿方法は、まず何らかの方法（現地はもちろんオンラインでも可）で僕に接触して、記事や論文を書いたMarkdownのテキストと表題を何らかの方法で渡してください。受け取ったら無検閲・無条件に次号のアンリベ紙にコピーして載せます。なお、記事の掲載されるページの順番は先着順となります。印刷は親に隠れて家のコピー機を使うか人の少ないコンビニ等でこっそりと地下出版します。これは基本的に紙媒体で配布しようと思いますが、勝手にネットに上げてもらっても構いません。というか公式が上げちゃってます。コピーや改変、再配布は当然、無制限に自由なので拡散よろしくです。

（秋井乃音）

1学期、席次強制に対する闘い

僕の通う学校で、7月11日の事務連絡で席次の固定が強制されて以降、僕は緩くではあるがその支配に対する抗議運動を始めていた。思想ぶっ濃い抗議文を執筆しスレッドに投下したが、友人に引き留められて一旦中止。後日、先生と雑談する機会があり、そこで直訴した結果まあまあの共感を得られ、上層で会議すると言ったため抗議文をDMで送信した。その後すぐに夏休みに入ったため、進展はそこで止まっている。実際に直接行動として好き勝手な席に座ったが、まあちょっと応援してくれる人はちらほら居て有り難かったが、手応えとしてあまりインパクトを残せた感じとは言い難い。しかし、この運動の試み自体は僕の仲間達に評価された事があり、今後も継続するつもりだ。

以下、抗議文全文を掲載する。

今回のお知らせにおける「各自の判断による席次の変更はNG」「改善が見受けられない場合には然るべき措置を取る」といった通達は、一方的な上からの席次の設計の押し付けであり強制であり、自生的秩序を破壊する非常に権力

的(Herrschaftlich)な支配に他ならない。そもそも、好きな席に座って何の問題があるというのか。友人から聞いた話によると、転んで歯を打ったことがきっかけになったらしいが、それは個別の問題であって、直接関係もない多くのメンバーの自由を制限する理由には、どう考えてもなり得ないし、なり得るとしたらそれは紛れもない全体主義だろう。

席次が強制であると、常に同じ所で同じ人としか隣になれず、クラス内のコミュニケーションを阻害し、人間関係は画一的で無味乾燥なものになるというデメリットがある。それに対し、席次が自由であると、各人が好きな人や興味ある人の隣に座ることができ、また自発的な相互扶助による譲り合いが生まれ、人間関係は活性化し多様なものとなり、席次は自然と最適化されるというメリットがある。

この要求に反論できる余地が存在するなら、返信で明確に答えて頂きたい。じっくりとした対話を交わしたい。民主的な対話を経た結果として、相互に納得して合意できる点まで折り合いを付けることができれば、進歩的戦術としてそれを受け入れることも検討する。しかし私は、自由の絶対的な擁護と全ての支配や権威に反抗するという、アナーキズムの原則から妥協することは決してない。

この抗議は、単なる不満や反抗期的な衝動として片付けられるものではない。アナーキズムに依拠にした行動だ。これは、国家や資本主義のイデオロギーとして内面化されて、学校生活にさえも露骨に押し付けられた支配を粉砕する、極めて政治的なアナーキストの実践であり、日常生活の革命である。そしてここに、私はアナーキストであると明確に宣言する。一般的にはアナーキズムは無政府主義と訳され極左と誤解されるが、「自由でありたい」「支配されたくない」といった極めて本能的な欲求を、疑いようのない原則として一貫して追求する、ごく当たり前で普遍的な倫理的立場である。私は過激でも何でもない、ただ真っ当なことを主張しているだけなのだ。

私は断固としてこの席次強制に抗議し、即時撤回を要求する。即ち、席次の完全自由化を要求する！もし要求が通らなくたとしても、支配に反逆して好き勝手な席に座る、すなわち直接行動として実質的な自由化を実現させてみせる。闘争は始まったばかりだ。せいぜい対話を楽しもうぜ。

(秋井乃音)

【初心者向け解説】リバタリアン・マルクス主義とは？

結論から述べると、リバタリアン・マルクス主義(Libertarian Marxism)とは、マルクスの原典的かつ反権威主義的な解釈や実践の諸潮流を指す総称的な概念である。その潮流には、パンネクーラの思想家が提唱した民主的な労働者評議会による生産手段の自主管理を指向する評議会共産主義(Council Communism)や、資本主義の消費社会における客体化をスペクタクル(見せ物)だと批判し状況の構築による日常生活の革命を目指した状況派(Situationist)、幅広い層の「プロレタリアート」の草の根のボトムアップでの組織化と多様な抵抗実践を重視する自治主義(Autonomism)などが挙げられる。

原典的とは即ち『ゴータ綱領批判』や『フランスにおける内乱』などのマルクスの著作原典における「自由な生産者のアソシエーション」「各人からはその能力に応じて、各人へとはその必要に応じて」といったコンセプトに対して忠実であるという事である。

反権威主義的とは即ち、このリバタリアン・マルクス主義とはまた別に、マルクス主義内部に権威主義的(Authoritarian)な潮流が存在する事を意味し、それらに反対し対抗する意を示して対義語となる形容詞「リバタリアン」が頭についているのである。ただし注意として、ここで言う「リバタリアン」とは、アメリカ合衆国においてノージックやロスバードが提唱したリバタリアニズム——という市場原理主義者が名前を篡奪したものとは異なり、権威に反対し自由を重視するという本来の広義なニュアンスがある。また、唯物弁証法の解釈において史的決定論に陥らず自由意志の役割を肯定するという哲学の自由意志論の意味も含まれる。

その権威主義的な潮流は大きく分けて以下の二つに大別できる。一つ目は、バクーニンが警告した「プロレタリアに対する共産主義者の独裁」とも形容される国家資本主義的生産様式へと逸脱した、レーニン主義やスターリン主義、トロツキズム、毛沢東思想、ティトー主義、ホッジャ主義、主体思想などの自称「社会主義国家」の体制正当化イデオロギー。二つ目は、国家を階級的抑圧機構と分析するマルクス主義伝統の国家観を忘却し、国家を再分配や福祉に利用し、生産関係を変革せずに資本主義の延命に加担する社会民主主義やユーロ Kommunismusなどの議会左翼。

これらは両方ともマルクスの原典から大きく逸脱しているが、レーニン主義を「成功」と吹聴するプロパガンダのせいで、20世紀のマルクス主義運動は「マルクス・レーニン主義」が主流派となってしまう、戦間期におけるリバタリアン・マルクス主義的な運動はスペイン革命でCNT-FAIと共闘したマルクス主義統一労働者党(POUM)くらいしか思いつかない。フルシチョフのスターリン批判以降にはトロツキズムが新左翼で注目されるようになったが、ソ連を墮落したと規定しつつも労働者国家だから防衛せよとするなど、トロツキズムも所詮ボリシェヴィキ的な誤謬を引き摺っているのだ。

プロレタリア独裁についても再考しよう。多分マルクスが意図していたのは、前衛党独裁と拡大解釈したレーニン主義などとは全く異なり、自由な諸個人の自発的な結合—アソシエーションの全社会的な拡大に伴って、反動から革命を守りつつプロレタリアートが政権を掌握し、最終的に国家を解体するための、漸進的な戦略だと捉えられる。その背景には、当時の19世紀ドイツ語圏において独裁(Diktatur)という言葉は古代共和政ローマの独裁官のイメージがあり、あくまで非常時の臨時的なインペリウム行使というニュアンスがあるのだ。

第1インターナショナル(国際労働者協会)でのマルクス派とバクーニン派の対立に典型されるように、アナキズムとマルクス主義はしばしば対立するように捉えられるが、19世紀後半に明確な対立軸が形成される前は、皆んな「社会主義者」であった。彼らの目指すべきポスト資本主義のオルタナティブの理想社会は「支配も疎外も無く自由な諸個人が自発的に結合し十全に発展する社会」であって、それを引き継いだ両者のビジョンも究極的には共通するのである。

なぜ両者は対立するかというと、組織論や戦略の方針の違いに起因する。これは一般論でしかないが、しばしばマルクス主義者は強力な革命党の建設を目指しつつ、共産党宣言にあるように民主的諸政党との協調を重視するなど、割と「柔軟」な姿勢が見受けられる。また一方のアナキストは、自由連合やアフィニティ・グループを重視し、プロレタリア独裁の権威主義化を察知して国家は即時廃絶すべきするなど、倫理に対して原則主義的で「頑固」な姿勢が見受けられる。

アナキストとリバタリアン・マルクス主義者は、先ほど述べたように共通の原則や理想を持っているので、戦略を無理に一致させることなく、戦線ごとに棲み分けながら互いに尊重し、同じ「リバタリアン社会主義」という大きなプラットフォームの上で一翼として共闘できる可能性が見えてくるのだ。権威主義に墮した既成左翼の欺瞞を世に明らかにし、真の正統な社会主義—リバタリアン社会主義が復権するには、21世紀の社会主義運動においても尚このアナキストとリバタリアン・マルクス主義者の共闘は重要になる、と結論付けてこの解説は締めくくらせて頂く。

万国の労働者よ、団結せよ！

Note

英語圏に比べて日本語圏では日本共産党の影響が大きいせいか、リバタリアン・マルクス主義は馴染みの薄い概念なので、この解説を書いた。今後も普及啓蒙に努めていく。

(秋井乃音)